

2024 年度 9 月入学

修士課程 一般入学試験・国費留学生等入学試験・学内選抜入学試験（第 2 回）

2025 年度 4 月入学

修士課程 学内選抜入学試験（第 1 回）・海外指定大学特別選考

事前課題

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含まれます。

設問

課題文では紙媒体での読みの特徴が紹介されています。それに対する筆者の考えをまとめた後、日本語教育における紙媒体とデジタル媒体のあり方について、具体的な事例に即して、自身の考えを述べなさい。

デジタル・デザインの視点から「読み」を考える

この30年の間に紙媒体での読みとデジタル媒体での読みとの間が少し縮まってきたようだ。この背景には、デジタル・デザインが、紙媒体での読みの特徴を組み込む努力をしてきた経過があると思われる。この点で、デジタル・デザインの立場から2005年にマールシャルによって書かれた紙媒体での読みの分析は示唆に富む(Marshall 2005)。2005年といえば、アメリカでも電子書籍やデジタル教科書が急速に普及し始めた時期である。その時点で彼女は紙媒体での読みの特徴を分析することで、何をデジタル媒体での読みにデザインしていくべきなのかを考えたのである。

マールシャルによると、読みには4つの特徴がある。まず一つ目は、移動性である。実は読むという行為は非常に移動性を持ったものだという。確かに本はどこにでも持ち運びが便利で、読むという行為は場所を選ばない。人は通勤・通学の途中や旅行の時に読む行為をよく行う。2001年にマールシャルが行った調査では、当時、コンピュータのデジタル・ファイルを印刷して読むと答えた人の90%近くが、どこでも好きなところ、または必要な場所(会議室など)に持っていけることをその理由に挙げたという。デスクトップのコンピュータの前に拘束されないことが重要だったのだ。この問題は、小型のラップトップ、タブレット、そしてスマートフォンの普及で解決されることになる。

読みの二つ目の特徴は、紙の媒体の持つ質感である。身体性といいかえてもいい。ページをめくった時の紙の感触や、何ページぐらいある本で、どれくらい読み進めたかなど、本の物理性を視覚的・触覚的に感じることである。「あのセリフは、本を三分の一ほど読み進めたあたりの、ページの左上のほうだった」などという記憶は読者もあるだろう。こうした読みに関わる空間記憶のようなものは、スクロールで流動するデジタル・テキストより、空間が固定されている紙の上での読みのほうが定着度が高い。これは非常に重要な点だ。最近では、ページ数を表示したり、ブックマーク機能をつけたりした電子書籍も多くなってきたが、それでも、なかなか物理的な本とは同じ感覚・記憶を持ってないようなのである。一部の電子書籍では、実際の本のページのようなレイアウトにするなど、さまざまな工夫がされているが、この物理性・身体性はデジタル・デザイン上の大きな課題であろう。結局、本は情報であると同時にモノなのだ(少なくとも今のところは)。

三つ目の特徴は、対話性(インタラクティブさ)である。私たちはテキストを読む時、しばしば重要な部分や心に残った部分にアンダーラインをひいたり、ハイライトしてみたり、丸で囲ったりする。また、疑問に思う箇所にクエスチョン・マークをつけてみたり、余白にメモを残したりする。こうした行為は、テキストとの対話と考えてもいい。このような対話をテキストと行うことは、特に学習の場面などでは、批判的な思考(クリティカル・シンキングといわれるもの)

を培^{つちか}うために、非常に重要だと考えられている。マーシャルの聞き込み調査によると、こうしたテキストとの対話を行う際に、ペンの形でできることが大切らしい。最近のデジタル・テキストや電子書籍には、ハイライトをしたり、メモをつけたりする機能がついているが、マウスやタッチパネルでの操作は、ペンでの操作とは同じではないらしい。

最後の特徴は、共有（シェアリング）である。「読む」は、個人の行為のような印象を持っている人が多いかもしれないが、本来はかなり社会性のある行為であることが指摘されている。そもそもどんな本やテキストを読むかの選択も、その人が属している社会やコミュニティの影響を大きく受ける。小学校の国語の授業で、クラス一斉に音読することをはじめ、実は私たちは多くの場面で、他人と読みを共有している。面白かった本を友達に貸すのもその一つだ。教員なら、子どもたちが、コンピューター・ルームで一人一台ずつパソコンがあるにもかかわらず、わざわざ1台の前に2、3人が集まって、一緒に画面を見ているなどという光景をよく見かけるだろう。デジタル・テキストでは、複数の友だちとファイルを共有したり、お互いのコメントを見えるようにするなど、人と人とを双方向でつなぐツール機能が発展してきた。

テキストは目だけでなく、手で読む？

このように、マーシャルの指摘する4つの読みの特徴は、デジタル上での読みの可能性と課題を明確化し、デジタル・デザインの進化の中で活かされてきた。紙とデジタル媒体での読みの差が縮まってきた要因の一つだ。

ただ、本の持つ物理性・身体性のメリットはなかなかハードルが高い。特に1ページにおさまりきらない長さのテキストで、テキスト内の異なるページを移動したり、パラパラとページをめくってみたり、複数のテキストの必要などところを読み比べたりなどという行為を行う際には、現在のテクノロジー技術をもつても、紙媒体の優位性が浮きでてくる。柴田と大村が行った一連の実験では、デジタル媒体では、紙の媒体と比べ、マウスやタッチパネル等での操作に認知負荷が多くなり、その結果、本来の認知活動（読解）への集中が途切れ、効率が落ちることが示されている（柴田・大村2008）。

たとえば、デジタル媒体で読む時には、ページをめくるのに、画面の端をタップしたり、スクロールしたりする必要があるが、人はページをすべて読み終わってから、そうした操作に取りかかる。視線もその際、テキストから一時離れる。一方、紙の媒体で読んでいる時は、人は無意識のうち、ページを読み終わる前にすでにページめくりを始めているという。ページをつかんで効率よくめくれるよう準備していたり、文書末の注釈などがある場合には、もとのページにすぐ戻れるように、あらかじめ指を挟んでいたりする。柴田と大村の実験では、特定のページに戻るためにかかった時間は、紙媒体での読みではパソコン上での読みに比べて 36・5%早く、タブレット上での読みに比べて 38・6%早かった。

さらに興味深いことに、人が紙のテキストを読んでいる時、紙を持つ手の位置を詳しく観察してみると、往々にして手の位置は、その時読んでいる行の位置と一致していた。つまり、手の位

置が、読みの視線を誘導する役割を果たしていたのである。こうした手の役割が、認知資源の有効な使い方につながっている。私たちは、テキストを読む時、目だけでなく、手で読んでいたのである。

マーシャルのいう対話性も、実は物理性・身体性と深く関係している。私たちは読む際に、しばしば無意識に、単語や文を指やペンなどで指し示したり（ポインティング）、なぞったりしている。柴田・大村の実験によると、誤字脱字などの校正をしてもらうタスクをもらった時には、紙媒体ではポインティングやなぞりがデジタル媒体での読みより多く、誤字脱字を検出できた割合も高い。校正作業の中でも、誤字脱字といった比較的表面的な読みでできるものではなく、意味や文脈のつながりのチェックなど、深い読みを要求する校正では、紙とデジタルのパフォーマンスの違いがさらに広がるという。面白いことに、紙媒体での読みでも、ポインティングやなぞりができないように制限をかけると、校正のパフォーマンスが落ちる。

さらに、横書きの紙媒体のテキストに書き込みをしたり、テキストをなぞったりする時の様子を観察すると、多くの人はテキストを水平ではなく、少し傾けてこのような行為を行っているという。読みのスピードと理解のパフォーマンスが一番良いのは、右利きの人の場合は、時計反対回りに5度程度テキストを傾けた場合で、左利きの場合は、その逆方向になる。

柴田・大村は、読みのパフォーマンスを上げるために、私たちは目よりも手の動きの適合を重視していると言っている。つまり、目にとつては水平でなくても、テキストと対話をしやすいよう、手による操作の使いやすさが優先されるというのだ。同じ結果は英語のテキストを読んだ時にも見られたことから、柴田・大村は、手で扱いやすいように文書を傾ける行為は、言語の種類に依存するものではなく、手の動かし方に依存するものだと言っている。ここでも読みの身体性が強く支持されているといえるだろう。